草の芽句会だより

NO,176
23，4，6

シャボン玉すぐに消えたり花の風　文子
心配の一つ片づき花の莫蓙

楠若葉見上げる城の雲早し　範子
惜しみなく止めどなく降る花吹雪

自撮りする桜の前の夫婦かな　貞子
朝日受け若葉きらきら雨上り

残る花あるか無きかの風に散る　純子
春暁や一番電車の軋む音

友を追ふ城の坂道花吹雪　禮子
野良猫と花見弁当分ち合う

春落葉一人の刻を楽しみぬ　剋子
資料館の静けさに咲く残花かな

すいと軒くぐる燕や朝の雨　節子
つぶら目の石人形に春の雨

出席者　大黒　川原　吉崎　馬場　森　小山
投句者　氏家

明け方まで降った雨も上がり、城山では屋台のテントが並び始めている。桜は終わりかけたが朝から人出が多い。枝先に残る花が雨に濡れキラキラ輝いている。うるし林では足下にしろつめ草が一面に広がり小さな花をつけている。屈んで声をかけたくなるような可愛い花である。桜が終わると城山には、続々と花が咲く。見返り坂のつつじ、濠端には合歓の花。同じ場所に、同じ花が咲くことを知っている私達は、毎年楽しみに見て回る。

振り返れば、城山の花とのふれ合いはもう半世紀以上にもなる。草の芽が長く続いてきたのは、すぐ傍にお城があるからという一言に尽きる。残花が風に吹かれ散るのを眺めながら、長い恵まれた年月を思う。私達は、お城に足を向けては寝られない？のである。